ハレバレモンスターSTORY

第１章

第６話　夏嫌い

ハレバレタウンの一角にある、カフェ「４U」
『涼しー』
「生き返る～～」
『よかったね、申請通って』
「うん、ありがと付き合ってくれて、私だけじゃどうにもならなかったよ」
『それを言うなら、申込書作ってくれたテツくんやハルネの案を形にしてくれたホーミンやヒタチくんのおかげでしょ、私は付いてきただけ』
「そんなことないよ、あの日リィが一緒にやろって言ってくれなかったら、アタシ何にもしてなかったと思う。やりたいくせに何でもない顔してさ、そのまま夏が終わってたんだろうなって」
『じゃあ思いっきり楽しまなきゃね！』

「ねえあそこにいるのニックじゃない？」
『ほんとだ、ニックん！』
「リィさん、ハルネさん」
『何してるの？』
「別に、宿題してただけ。二人は？」
『作戦会議、そうだニックんも一緒に花火打ち上げない？』
「何それ、別にボクはいいよ」
『なんでー？』
「何でって、暑いし。」
『そりゃ夏だもん！夏だし夏っぽいことしようよ』
「いや、そもそも夏好きじゃないし・・それにハルネさんの意見だって」
「アタシは全然い～よ～」

「・・・わかった、じゃあ他にも声かけてる人いるんでしょ？みんながいいなら参加するよ」
『やった！絶対みんないいって言うよ！』

「何でボクを誘ったの？別に仲が良かったわけじゃないじゃん」
『んーニックんって、私が休んでる時に転校してきてたでしょ、だからなんかタイミング逃しちゃってて、話してみたいなって思ってたんだ』
「そうなんだ、別に大して面白いやつじゃないよ。っていうか、リィさんってそういうキャラだったんだ」
『そういうって？』
「なんていうか、けっこう強引に周りを巻き込んでいくっていうか。そういうイメージなかったからさ。まぁボクがあんまり話してなかっただけなんだろうけど」

不思議な人だ。ボクが３ヶ月前に転校してきた時、彼女は何日か休んでいた。
その後、登校してきた彼女を初めて見た時から明るくて誰とでも話してはいたけど、どこか無理をしているような、そんな違和感を少し感じていた。
休んでいた理由は家庭の事情とだけ先生が言っていたから、何かあったのかもなくらいには思っていたと思う。
家庭のことを聞くのははばかられたし、なにより聞き返されるのが嫌だったから大きな接点もないまま夏休みを迎えた。
このまま何事もなく夏が終わるだろう、そんな風に思っていた矢先の誘い。

『やっぱ、みんなと一緒が楽しいじゃん』
確かにこれまでの私ならこんなに強く誘ってなかったかもしれない。
みんな仲良く一緒にいたい・・・もうあんな想いはしたくない。

『それじゃ、私はそろそろ行くね、みんなに話してこなきゃ。また明日ね！』
「まだ確定じゃないから、さよなら」
『もう、さよならとか寂しいこと言わないの！じゃあね』

さよならが寂しい言葉か・・・ボクはまた明日のほうが淋しい